

第 35 話 (19 頁) 王様とお百姓

ある王様が宮殿を建てていて、宮殿のまえに庭園をつくりました。ところが、庭園の入り口のまんまえに、ほったて小屋が立っていて、まずしいお百姓が住んでいました。王様はほったて小屋で庭園がだいなしにならないように、その小屋をとりこわしたいと思いました。そこで大臣をまずしいお百姓のもとにやって、小屋を買い取ることにしました。

大臣がお百姓のところへ行って言いました。「おまえはしあわせものだ。王様がおまえの小屋を買い取りたいそうだ。こんな小屋は 10 ルーブル*もしないが、王様は 100 ルーブルくださるそうだ。」

お百姓は言いました。「いいえ、この小屋を 100 ルーブルで売ったりはいたしません。」

大臣が言いました。「それなら、王様は 200 ルーブル出してください。」

お百姓は言いました。「200 でも、1000 でも手放しはしません。わたしのおじいさんも、父親も、この小屋でくらし、死にました。わたしもここで年をとり、死ぬんです。神様のおぼしめしです。」

大臣は王様のもとへ行って言いました。「百姓ががんで、なにも受け取りません。王様、百姓には、なにもやることなどありません。お金をかけずに、小屋をとりこわすよう、お命じください。それだけのことでございます。」

王様は言いました。「いや、そういうことはしたくない。」

すると大臣は言いました。「では、どうしたらよろしいので？ 宮殿のまえに、くさったほったて小屋が立っていて、ほんたによろしいのですか？ 宮殿を目にするものは、だれもがこう言うでしょう。りっぱな宮殿なのに、ほったて小屋でだいなしだ。どうやら、小屋を買い取るお金がなかったらしい、と。」

王様は言いました。「いやいや、宮殿を目にするものは、こう言うだろう。王様はたいへんなお金持ちだったようだ。これほどの宮殿をつくったのだから、と。そして小屋を目にすれば、またこう言うだろう。どうやら、この王様には正義もあつたようだ。小屋をそつとしておけと命じたのだから、とね。」

*ルーブル…ロシアのお金の単位。1 ルーブル=100 コペイカ

「札束で頬をたたかれても、心を動かされなかったお百姓の気概が断然光っている。」

「ロシアの農民の、土地に根差したたくましさを感じるよ。『私もここで死ぬんです。神様のおぼしめしです』って、本当に心に迫ってくる科白だ。」

「お百姓の家は、如何にも邪魔だ、という感じがありがたね。あるのは、庭園の入り口の

前じゃなくて『まんまえ』。見かけは『ほったて小屋』で、途中では『くさった』と修飾語まで付けている。これでもか、と言わんばかりだよ。」

「そんな粗末な家に住んでいるから、当然暮らしは貧乏。『まずしいお百姓』と、地の文で二度も使われているぐらいだ。」

「立ち退かせるべく命を受けた大臣は、はなからお百姓を蔑んでいる。王様が高い金で買い取ろうというのだから、ありがたいと思え、と高圧的な態度で出てきた。」

「当時とすれば、当たり前前の接し方じゃないか。王様の命令を律儀に守ろうとした忠臣だよ、間違いなく。」

「でも、融通がきかない。もっと優しい言動で迫れなかったものか。」

「同じことさ、結局は。どう攻めてもお百姓が心変わりするとは思えないからね。」

「その王様だけど、民の心が分かっている立派な王様、ということかな。」

「大臣は主君の心が読めなかった。王様をがっかりさせたのだろうか。」

「いいのは王様で、悪いのは大臣、というのが一般的な受け止め方だろうね。」

「そうだろうけど、王様の言動にはちょっと引っかかるね。お百姓の願う通り、そのほったて小屋を残しておいたら、後世の人が『この王様には正義もあった』とたたえるだろうと、それも自分から言い出しているんだから。」

「この『正義』には違和感がある。思いやり、がびったりだと思っただけだ。」

「自分の名声を考える王様って、やっぱり民のことを考えているとは言えないよ。」

「王様は賢い、という印象だ。ひょっとして『ずる（賢い）』がつくかも、ね。」

「大体、自分からほったて小屋を取り壊そうとしたのに、大臣からの報告で、一気に心変わりしちゃった。節操がないとの見方もできる。」

「ほったて小屋があるのは王様も知っていたのだから、そもそも庭園の入り口を別のところに決めれば、こんな問題自体が生じなかった…」(笑い)

「どうも、みんなの雰囲気は、王様に分が悪いね。」

「ただ、王様が自分で話すからいやらしいんであって、後世の人がそう評価したとか、地の文で書いたら、もっと素直に王様の行動を評価できたのではないかな。」

「家を守り抜いたお百姓は、ここで亡くなるとして、その子孫たちこの家を守っていったのだろうか。」

「家はもっと老朽化するし、そこまでは考えない方がいい。せつかくの主題から話がそれてしまうからね。」